

# 第 1 章 まえがき

新工学教育プログラム実施検討委員会委員長  
田中一義

工学部のファカルティ・ディベロップメント（FD）シンポジウム開催は、2002 年度をもって全 6 学科を一巡した。FD 活動の一環として本委員会が企画した一連のシンポジウムは 2000 年度から開始されたが、これは 8 大学工学部が連携して構成している工学教育プログラム実施検討委員会で議論されてきた内容を受けてのことであった。本学工学部のやりかたとしては、各学科によって特色はあるが、概ね 2 あるいは 3 回生の専門講義科目及び学科について設定されたアンケート項目とこれへの学生からの回答の解析説明を行い、続いて教官側と学生側に分かれて討論するディベート形式によってシンポジウムを開催する方式をとっている。さらに、教育方面の専門家あるいは他大学の教官にコメンテータとして参加頂き、全学科の教官にもフロアーとして加わって頂いた。開始の詳しい経緯については、第 7 章に述べられている。FD シンポジウム開始当時の状況としては、FD 活動への教官側の関心が必ずしも非常に高かったわけでもなく、言わば試験的にとにかく実施するという感があったことは否めない。こうして工業化学科、地球工学科、次いで物理工学科の FD シンポジウムが実施され、その記録が本高等教育叢書 12 に組まれて発行されている。

さらにこれに続いて残る 3 学科、すなわち建築学科、電気電子工学科、及び情報学科の FD シンポジウムが 2001-2002 年度にかけて実施され、その記録をまとめた本書が引き続き高等教育叢書 15 として発行されることになった。FD シンポジウムにおいてはディベートを行う教官席と学生席は向い合っており、これにコメンテータ及びモデレータ席が加わって四角形の各辺を形成する。モデレータ席を除く、以上の三種の席の周りを同心的にフロアー席が取り囲む配置を 8 号館大会議室に設営した。建築学科と電気電子工学科の FD シンポジウムでは教官が学生の役割を演じる方式をとったが、情報学科の数理工学コースの FD シンポジウムでは 4 回生及び院生が学生側の役割を演じるという斬新な方式をとった。

さらに、本学の高等教育教授システム開発センターではかねてから全学的な授業参観にもとづく高等教育法解析をフィールドワークとして実施しておられ、本委員会にも工学部からの参観授業提供の要請があった。そこで工学部としては 2002 年度前期授業のうちの 3 科目を提供した。この参観結果の解析に基づいての工学部教育 FD ジョイントワークショップが当該授業の教官をまじえて 2002 年 9 月に開催されたので、その記録も本書の第 6 章として含めることにした。したがって、本冊子の題名はこの趣旨をも含んだものとなっている。

ところで、本書に収められている後半 3 学科の FD 実施期間中においては、以下の二点が同時進行的に大きくクローズアップされてきた。その第一として、2004 年度に移行が予定される独立行政法人化に向けて具体的な準備をする局面に入らざるを得なくなったことがある。ここでは 6 年間にわたる中期目標・中期計画の策定が必要となり、その中で具体的な教育目標・計画を立て、かつその計画遂行に対する評価を行う必要が explicit に出てきた。これに当たって、工学部で FD 活動のノウハウを蓄積してきたことは、少なくともまず技術的に貴重である。第二は、工学部に入学してく

る学生の学力並びにインセンティブの相対的低下が教官団に広く認識されてきた時期が本期間と重なっていることである。良いか悪いかは別にして、これらの因子が当初は半信半疑で始まった面のあるFDシンポジウムに追い風になってきた感もある。

特に後者の因子は、個々の専門基礎科目における学生の学力向上をいわば「学校」として目指しながらも、「大学」本来の使命として、工学部学生としての意識を高めるための努力を我々工学部教官団が同時に行わねばならない局面に入りつつあることを意味している。技術者・研究者を目指して大学に入学し、良い意味での「徒弟」になるはずの工学部学生は、その平均像においては何となく教育を受けるためにやってくる「客」に変質しはじめており、その気質・資質の平均値は旧制大学どころかつい先頃までのものから画然と乖離しつつある。逆説的に見れば、恐らく教官にとってのFD活動のとりあえずの効能は、単に授業評価の結果を見るのみならず、学生が大学に求めていることの平均値が一昔前に自分の経験してきたこと これは無意識的に教官の自己規定に深く結びついている と大きくかけ離れてきたことを確認し、深い意味で工学教育を今一度考え直すきっかけを与えたことではなからうか。シンポジウムにフロアーとして参加された方々の意見の集積点の一つとしても、このことが窺える。さらに第5章で展開されている議論のように、我々が行っている工学FDシンポジウム自体が教育の専門家にとっての解析対象になってきている点も興味深いことである。

しかし言うまでもなくシンポジウムの実施そのものがFDの目的ではない。その結果をフィードバックして、各学科における講義ひいては教育システム改善に具体的に結びつけてこそ、本来の意義が生かされ、存在理由も出る。実際に各学科に対するアンケート結果が何らかのきっかけとなって、現在、学科の教育システムの改善を促している面もある。また教官団のみではなく、学生・教官団を支援する事務組織の意識とその効率の一層の改善も必須であろう。全学科を一巡したFDシンポジウムはまた数年間をおいた後に実施されるであろうが、次回のテーマとして何が選択されるかということは今回の一連のFDシンポジウム活動成果を正直に反映したものとなるはずである。今後数年間における桂キャンパスへの移転という我々特有のイベントが学部教育にとっての逆風にならないための努力を怠らないのはもちろんのこと、工学部教育全体の向上のために学部学科組織・教官団・事務組織全体を網羅した教育システムの進化・改善が期待されている。